

主 題：キリスト者と献身的な伝道

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章5－6節

テーマ：献身的に伝道する者として成長し続けていくために

今朝、見ていきたいのはコロサイ人への手紙4章のみことばです。これまで1章から順番に学んできましたが、きょうは特に4：5－6を中心に学びたいと思います。

ただその前に、まず一つのストーリーを一緒に考えてみてください。これは魚でいっぱいの小川や湖に囲まれた地域に住んでいた漁師たちのお話です。毎年毎年みずからを漁師と呼ぶ者たちは、会合に集い、漁師としての務めや漁の方法について語り合っていました。彼らは漁について議論をし、あらゆる漁の方法について聞くために、費用のかかる全国的、世界的な会議を主催しました。また、漁師たちは漁業本部と呼ばれる大きくて美しい建物を建てました。彼らの訴えは「だれもが漁師になるべきであり、すべての漁師が漁をすべきである」ということでした。しかし、ただ一つ彼ら自身は漁をしませんでした。彼らは魚がたくさんいるほかの場所に漁師を送り出すための委員会も組織しました。その委員会は漁について語って、漁を定義し、またいろいろな色の魚が生息している、遠くの川や湖で漁を行うという考えを進めていく、そんなすばらしいビジョンと勇気を持った人々によって形成されていました。委員会は職員を雇って、委員を任命し、またどの新しい川で行うのかを決定するために、何度も会議を開きました。しかしただ一つ、職員も委員会のメンバーも漁はしませんでした。漁師に漁を教えるための、高価なトレーニングセンターも建設されました。そこで教える先生たちは、漁の博士号を持っていました。しかし、ただ一つ、彼らも漁はしませんでした。ただ、彼らは漁を教えるだけでした。確かに多くの漁師たちが犠牲を払ってさまざまな困難に耐えていたのも事実です。ある者は水辺の近くに住み、毎日魚の死臭に悩まされていました。また、ある者は漁師として人々から嘲笑を浴びていました。さて、想像してみてください。ある日、魚をとらない人は、幾ら自分が漁師であると主張しても、実際には漁師ではありませんと言われたとしたら、この人たちはどれほど傷ついたでしょう？でも、そのことばは正しいように思われました。毎年毎年1匹も魚を捕らえようとしない人は、本当に漁師なのでしょう？

○キリスト者が励む伝道：ふるまいとことば

思い返せば、イエス様が最初に、湖で網を打っていたペテロとアンデレに対して投げかけたことばは何だったでしょう？マタイ4：19に「イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」と記されていました。イエス・キリストについて行くこと、イエス・キリストに従っていくことは、人間をとる漁師になることと同じでした。キリストの弟子たちにとって、キリストとその福音をこの世の人々に宣べ伝えていくということは、決して欠かすことのできない務めだったのです。そしてもちろんそのことは、私たちが今学んでいるこのコロサイの手紙を記したパウロもよくわかっていました。かつてキリストを熱心に迫害する者として生きていた彼が、イエス様に出会って救われ、その後主ご自身から大きな務めを与えられたのです。そのことが使徒9：15－16に記されています。イエス様はパウロに対してこんなことを言われていました。「：15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。：16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」と。これがパウロの救われた後のその生き様を預言するものでした。そして、そのことばのとおり、パウロは苦しみながらも最後の最後まで熱心に伝道に励み続けていました。人間をとる漁師として、キリストのあかしを人々の前で建て続けていたのです。

そして、その伝道という責任は、何もペテロやアンデレ、パウロだけに与えられているものではありません。同じようにキリストに付き従っていこうとする私たちひとりひとりにも与えられているものです。私たちは確かにみことばを通して、いろいろなことを知ることができます。神様について知り、キリストについて知り、教会の中であって、兄弟姉妹の間でみことばを實踐して、互いに愛を實踐したり、へりくだりを實踐したりして歩み続けていくことも私たちにとって大切です。でも私たちが忘れてはいけないことは、私たちにはキリストのあかしをする、伝道をするという責任が与えられているということです。そしてその伝道に関して、パウロはこのコロサイ4：5－6で、それがいったいどんなものなのかを私たちに教えてくれていました。実際にキリストのあかし人として、証人として歩んでいたパウロが、信仰者が未信者の前で気をつけているべきこと、どのようにして伝道していくのかということに関して大きく二つ、そのふるまいとことばということについて教えてくれていました。信仰者はどのようにして生きていくのかということが明らかにされていたのです。ですから、みことばを通して神様が何を言われているのかということを考えてみましょう。そして、自分自身の歩みと照らし合わせながら、果たして自分はキリストの証人として福音を宣べ伝え、人間をとる漁師として召された者にふさわしいあかしを建てているのだろうかと考えてみてください。聖書が明らかにしている信仰者に求められるふるまいやことばというものが、果たして私たちのうちに見て取ることができるのかということをよく自分のこととして考えてみてください。間違いなく言えるのは、前回見た祈りにしても、今回見る伝道にしても、完璧にできている人はひとりとしていません。私たちは成長し続けなくてははいけません。ですから、パウロが言っているそのことばに、よく耳を傾けて、祈りながらともに成長していきましょう。

コロサイ4：5－6

「:5 外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。:6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかりま

す。」

1. ふるまい 5節

では、早速「ふるまい」に関して考えてみましょう。この5節のうちに、二つの具体的なふるまいが記されていました。

1) 知恵とともに歩む 5 a節

まず一つ目のふるまいは「知恵とともに歩む」ことです。パウロは5節の初めに、「外部の人に対して賢明に（知恵をもって）ふるまい」と述べていました。

▶「外部の人」

ここで「外部の人」と言われているのは、まだイエス・キリストのことを自分の救い主として、主として信じていない、救われていない人たちのことです。キリストを受け入れていない、キリストの内側にいるのではなくて、キリストの外側にいる未信者のことを表しています。同じコロサイの中に、こんな表現が出てきていました。少し戻ってコロサイ2：6－7に「:6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。:7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」と書かれていました。救われている信仰者たちの姿でした。キリストを信じ受け入れている者たちというのはみんな、既にキリストのうちに入れられていました。キリストの中に根ざして、キリストにあって建てられながら日々を歩んでいこうとするのです。それが信仰者の歩みでした。でも、外部の人はまだその状態にはありません。未信者は神様の敵としてまだ遠く離れ、キリストやその救いのうちにまだないのです。そしてパウロは、兄弟姉妹たちがそのような者たちに対して賢明にふるまっていくようにと、知恵をもってふるまっていくようにと求めていたのです。

▶「ふるまう」

それは具体的にどういうことでしょうか？鍵になるのは二つのことばです。まずここで出てきていた「ふるまう」と訳されていることばには、もともと「歩く」とか、「歩き回る」といった意味を表すことばが使われています。聖書の中ではよく「歩く」という表現が出てきますけれども、この表現は、特に信仰者の歩みや救われている者たちの生き方を描くのに用いられていました。例えば、先ほど見たコロサイ2：6でも、パウロは「主キリスト・イエスを受け入れた」者たちが、「彼にあって歩みなさい」というふうに述べていました。この「歩みなさい」ということばは同じことばが使われています。また、これ以外にも、ローマ13：12-13に、「：12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。：13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。」と書いています。この「生き方」というのが、今見ている「ふるまう」と同じことばが使われているのです。「ふるまう」ということばを口にした時、パウロが言わんとしていたことは明白でした。未信者——神様をまだ知らない者たちに対して、兄弟姉妹たちがごくまれに賢明にふるまうということを行わんとしているわけではありません。どんな時も同じようにふるまうこと、どんな時も同じように歩んでいることが求められていたのです。外部の人たちに対して、私たちが賢明に知恵をもって生き続けていることが大切だと言うのです。

これは、「歩く」ということを考えても容易に読み取ることができます。どういうことかと言うと、歩いている状態とはどんな状態でしょう？それは、例えばその人がその場に立ち止まっている時は歩いているとは言いません。歩くというのは、一步一步前に足を踏み出して進み続けている状態のことを言うのです。私たちも信仰者としての歩みを止めてはいけないということです。家や教会の中では信仰者として歩んで、神様を知らない外部の人たちの前では、その歩みを止めるようなことがあってはいけないと言われているのです。どんな時も変わらない生き方をしていることが求められているのです。

▶「賢明に」

またそれに加えて、ここでパウロは「賢明に（知恵をもって）」ということばを足していました。このことばを文字どおりに訳するのであれば、「知恵のうちに」とか「知恵とともに」と訳すこともできます。パウロがここで言わんとしていることは、外部の人たちに対して知恵をもって、知恵とともに、知恵のうちに歩み続けていきなさいと。では、この「知恵」というのは何でしょうか？これは簡潔に言えば、知識というものを実際の歩みに当てはめることです。もっと言うと、みことばやキリストに関して、聖書を通して、多くの知識や理解を持っていること自体は素晴らしいことですが、それだけでは知恵とは呼びません。その知識を、日々の生活の中で実際に働かせていることを知恵と言うのです。知識が頭にずっととまっているのではなく、知識がその人の中に生きていることを言うのです。

例えば、ある人はこの聖書のみことばを通して、神様の聖さについてであったり、神様の愛についてであったり、また互いに愛し合うことであったり、互いに祈り合うことであったり、そういった教えを知っているかもしれません。ある人はキリストのあわれみ深さであったり、キリストのへりくだりであったり、救いのみわざに関しても知識をたくさん持っているかもしれません。でも、もしそのような人物の実際の歩みを見た時に、その人が罪に罪を重ねていたり、高慢になっていたり、愛を実践することをいつまでも拒んでいるのであれば、それを見た周りの人たちは何を思うでしょう？間違いなくその人が信じているものに対して、大きな疑問を抱くようになるでしょう。その教えの信憑性に対して疑いを覚えるようになったりするでしょう。だからこそ、すべての信仰者はどんな時も知恵とともに歩むことが必要でした。みことばやキリストの知識を、私たちは常に蓄え続けていくこと、それも私たちにとって大切です。でも、その知識が単に知識で終わるのではなく、その知識を働かせながら御霊の助けを祈り求めながら日々を生きていこうとするのです。信仰者が持っているその知識と、実際の日々の行いとがかけ離れたものではなく、一つに結びついていることが欠かせませんでした。

そして、まさにパウロはそのことをコロサイの兄弟姉妹のために祈っていたのです。兄弟姉妹たちがそのようにみことばの知識に満たされていくこと、そして満たされるだけではなくて、その知恵を働かせて、主の前をふさわしく喜ばれる者として歩いていくことを最初から祈っていました。コロサイ 1 : 9 - 10 にこんなふうに言われています。これは私たち自身も祈ることができることです。どんなことが書かれているかと言うと、「:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」と。私たちが知識を蓄えること、私たちが知識を知恵として働かせること、そしてその知恵によって私たちが主の前に喜ばれること、あらゆる善行をもって実を結んでいくということ、それはつながっているものでした。バラバラに区切れるものではないのです。パウロはコロサイの兄弟姉妹たちがそうやって生きていくことができるようにと祈っていました。私たちもそのことを祈ることができるのです。祈らないといけないのです。パウロはそのようにして外部の人たちに対して、信仰者たちが賢明に、知恵をもってふるまい続けていくこと、生き続けていくことを求めています。

自分自身の歩みを振り返ってみてください。果たして私たちは未信者の前にあって、日々賢明にふるまっているでしょうか？どんな時も変わらずに、キリストのあかしを建て続けているでしょうか？日曜日の礼拝の時と月曜日から土曜日まで、私たちの歩みは同じものでしょうか？それともことそれ以外のところでは変わってしまうものでしょうか？ウィリアム・ヘンドリックセンという先生も、この箇所に関して次のようなことばを残していました。「外部に対して賢明に振る舞いなさい。いつも覚えていてください。聖書を読む者は少ないかもしれませんが、全ての者があなたを読んでいるのです。」と。私たちの周りの人たちが、私たちの歩みを読んでいる、そのような見方で自分の生活を普段見ているでしょうか？家族は特にそうですが、それだけではありません。職場の同僚であれ、学校の友達であれ、道で出くわすような人でさえ、私たちがどんな歩みをしているのか、どんなふるまいをしているのかを目にしています。そして、もしかしたらその人たちは、自分たちが教会にやって来て、みことばやキリストの福音をその目で見る機会がないかもしれません。でもそんな人たちの前で、私たちはキリストのあかしを建てることができるということです。自分たちが知っている、自分たちがいつも信頼している神様のすばらしさというものを、罪人を救ってくださり、新しく造り変えることもできるその福音の力というものを、私たちはふるまいを通して、その人たちに示すことができるということです。

そして、そのことは聖書の中で繰り返し繰り返し教えられていました。イエス様もご自分の弟子たちにこんな務めをはっきりと与えていました。マタイ 5 : 14 - 16 に「:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と記されています。はっきりと言われていました。「あなたがた」、私たちは世界の光です。そしてその光を人々の前で輝かせるようにと。人々が私たちの良い行いを見て取ることができるようにと。一つ覚えてほしいのは、この箇所ではイエス様は、私たちのことばを聞かせなさいとは言わず、人々があなたの良い行いを見ることができるようにしなさいと言われていたということです。つまり私たちに与えられている責任、務めというのは、もちろんキリストの福音を語ることも必要ですが、実際にそれを生きたあかしとして、人々の前で明らかにし続けていくことも大切だということ、それも欠かせないということでした。自分のうちに持っている光を、私たちが目立たないように、目立たないようにと隠すのではなくて、神様のすばらしさをことばだけでなく、生き方を通して大胆にあかすのです。

そしてその時に覚えておかないといけないのは、何のためにそれをするのかということです。自分自身が人々から褒められるためにそれをするわけではありません。自分に焦点を集めるためでもありません。イエス様は「人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と言われていました。私たちが日々の中で変わらずに生きていくのは、私たちのためではありません。私たちのその行いを見た者たちが、天の父を仰ぎ見て、神様のすばらしさを知ることができるように、そのために私たちは変わらない生き方をしていく必要があると言うのです。どんな時も知恵とともに歩み続けていくことが必要だということでした。

2) 機会を十分に用いること 5 b 節

次に、二つ目のふるまいは、機会を十分に用いることです。5節の続きを見ると、パウロはこう言っていました。「機会を十分に生かして用いなさい」と。

▶「十分に生かして用いなさい」

ここで「十分に生かして用いなさい」と訳されているこのことばは、日本語だと長く感じますけれども、実はギリシャ語ではもともと一つのことばで、「買い取る」とか「買い占める」といった市場用語として用いられるものが使われていました。そのことばを用いて、パウロはいったい何を言わんとしていたのか、創造してみてください。例えば、ある人にずっと探し求めていた果物があつたとします。そしてそれを探しに市場へと行くのです。市場が近づいてくると、何とそのお目当ての果物がそこに並んでいるのが目に入ってきただけではなく、その果物の上に大きな張り紙で「今だけ限定」、「ただいまタイムセール中」と貼り出されているのを見たとする、この人は何をするとします？間違いなく一目散にそこまで走って行くでしょう。そして、そこにある、お目当ての果物を一つだけではなくて、全部買い占めてしまおうとするでしょう。なぜかという、次にいつ出会えるかわからないし、ましてや次にいつセールになるのかもわからないと知っているからこそ、その人はためらうことなく、この機会は絶対に逃すまいと、喜んですべてを購入しようとするでしょう。覚えていてほしいのは、まさにそれこそがここで使われている「十分に生かして用いなさい」ということばが言わんとしていたことでした。パウロは兄弟姉妹に対して強く訴えていたのです。もし、あなた方が未信者の前で賢明にふるまう、キリストをあかしする機会が与えられるようなことがあつたとするならば、その機会を十分に生かして用いなさいと。次にその機会が再びあるのかどうかはわからないから、決してそれを逃してしまうことがないようにと。

▶「機会」

また、ここでは「十分に生かして用いなさい」とだけ言ってはいませんでした。その前に「機会を」ということばがくっついていました。これは特定の機会のことを表していて、「過ぎ去ってしまったらもう取り戻すことのできない時間」を表わすのに用いられたりしました。それがここで言う「機会」ということばの表していることでした。そして私たちはそのことを実際のこととしてよく知っています。私たちがこの地上で与えられている時間というものは限られていますし、いつの日か必ず終わりがやって来ます。そしてその限られた短い時間の中で、キリストの福音をあかしする機会というものも過ぎ去っていくのです。だからこそ神様が与えてくださった機会があるのだとすれば、その機会がどんな機会であろうとも、私たちはむだにすることはできないということです。いつでも自分が望んだ時にその機会が与えられるのではなくて、神様がその門を開いてくださって、神様がその機会を与えてくださるのです。ですから私たちは、機会が与えられるのであれば、もう次にそれはやって来ないかもしれないという緊急性をもって伝えなければいけないことを伝える必要があるということです。いつでもその機会を追い求めて、キリストのあかしを建てる機会が与えられるのであれば、人々の前で知恵とともに歩み続けていくこと、あかしを建て続けていく必要があると言うのです。

ガラテヤ6：9－10にもこんなふうに書いていました。「：9 善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。：10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に

対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう。」と。またひとりの神学者 F F・ブルースもこんなふうに述べていました。「福音の評判が、その救いの力を経験したと主張する人々の振る舞いに結びついていることは今も変わらない真実です。自分で聖書を読んだり、神の言葉の説教を聞いたりしない人でも、それを行う人々の生活を見て、判断を下すことができます。それゆえクリスチャンは、今という機会を最大限に用いるようにしましょう。」と。振り返ってみてどうでしょう？ 私たちは今というその機会を十分に生かして用いているのでしょうか？ この世での自分の時間が限られていることを私たちが覚えて、その限られている時間の中で、神様や福音のすばらしさを周りの人々にあかししたい、明らかにしたいといつも歩んでいるのでしょうか？ それとも神様を知らない人と同じように考えて、同じようなふるまいをしながら、だれにもキリスト者として気づかれぬような歩みをしているのでしょうか？ 忘れてはいけないことは、福音のために門を開くことのできる神様が与えてくださる機会というのは、本当にいろいろな場面にあるということです。だれに対して、どこで、いつ、主のあかしを建てるようになるかは私たちにわかりません。だからこそ、その機会がいつ来てもいいように、時間をむだにすることなく、みことばを心に蓄えて知恵にあふれて日々を歩み続けていくことが必要でした。

もちろんその歩みは、難しさや葛藤というものがないわけではありません。私たちはその難しさも経験するのです。そして、私たちは多くの場合において、知恵に欠けてしまうことが多々あります。でも、もし私たちが知恵に欠けていることがあるならば、私たちは知恵を与えてくださると約束してくださっている神様に、いつも祈りをささげ続けることができるということです。実際、あのモーセもこんな祈りをささげていました。どんなふうに祈っていたかということ、詩篇 90：12 に「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」と出てきていました。私たちもこんなふうに祈ることができます。限られた日々を正しく覚えて、与えられている機会を十分に用いることが、私たちにとって求められていた二つ目のふるまいでした。

2. ことば 6節

さて、ここまで私たちは伝道においてのふるまいというものに注目しました。でも同時に、パウロは「ことば」についても教えてくれていました。未信者の前でどのようにふるまうのかだけではなく、どんなふうに話すべきなのかということに関しても、私たちは考えなくてはいけなかったのです。そのことが6節に書かれています。6節は、「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。」と始まっていました。

▶ 「ことば」

パウロは「あなたがたのことば」と言っていました。この「ことば」というのは、広い意味で私たちが口にすることばのこと、発言のこと、会話のことを表しています。私たちが福音を語るにしても、私たちが日常の会話をするにしても、公の場で発するものであったとしても、個人的な間で交わすものであったとしても、私たちがいろいろな場面で未信者と話す、ありとあらゆることばというもの、話というものを表しているのです。

▶ 「いつも」

そしてそんなことばが、「いつも親切で」あるようにと言われていました。注目してほしいのは、「いつも」ということばです。「いつも」とはもちろんだんな時もです。要するに、私たちのことばというのは場所によって変わってしまうものではないということです。教会にいる時も同じ、職場にいる時も同じ、店で買い物をしている時も同じだということです。私たちのことばは、人によって変わってしまうものでもないということです。家族や友人といる時も同じ、見知らぬ人といる時も同じ。たとえ私たちと意見や考えが合わない人といる時も同じだということです。またもっと言えば、私たちのことばは状況によって変わってしまうものでもないということです。良い時も悪い時も、喜びにあふれている時も、物事がうまくいっていないような時でさえ同じだということです。ですからパウロは、ここで「あなたがたのこ

とばが、いつも」と言っていました。未信者に対する私たちのことばというものが、どんな時も変わらないものであることが大切だと言うのです。

でも、それに加えてパウロは単にここで、ことばがいつも同じであることだけを求めていたのではありません。そのことばが特に二つの特徴を持っていることが求められていました。「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい」と言われていました。

1) 親切であること

一つ目の特徴は「親切」であることでした。私たちのその変わらないことばというのが、親切であることをパウロは求めていました。ここで「親切」と日本語で訳されていることばは、もともと「恵み」ということばが使われています。私たちが「神様の恵み」と言う時のあの恵みです。そしてこのことばは「優しさ」とか「親切さ」、「愛情深さ」、「忍耐」といった意味を含んでいました。つまり信仰者のなす会話というものが、どんな時であろうが、人をむやみに傷つけるものではなく、穏やかで、思慮深く、愛情深く、温和なものであることが求められているのです。「いつも」と言われている以上は、自分に良くしてくれる人や自分と意見が合うような人に対してだけでなく、自分をひどく扱うような人であろうとも、自分を傷つけるような者に対しても同じでした。主を知らない人たちに対する私たちのことばは、いつも柔和で恵みに富んだものであることが求められていたのです。それを聞いた時に、余りにも高過ぎることを求められていると思うかもしれません。でも、これこそ私たちがいつも模範にして、そのように変わっていきたくて願っているイエス・キリストの歩みでもあったのです。私たちの模範であられるイエス様は、まさにそのように恵みのことばを話す人物でした。

例えばイエス様が自分の育ったナザレの町の会堂に戻って、みことばを人々に語っていた時、イエス様のことばは恵みにあふれていました。ルカ 4 : 21 - 22 に「:21 イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。」:22 みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。」とあります。イエス様は恵みのことばを話しておられました。でもその姿はこの時だけに見られたものではありません。あの十字架の上でも変わりませんでした。人々から罵声を浴びせられてイエス様が十字架につけられた時、ご自分を十字架につけた者たちに対してどんなことばを発しておられたでしょう？そのことがルカ 23 : 34 に「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」と記されていました。恵みに満ちた方のことばは、恵みにあふれていました。この方は自分を苦しめる敵を憎んで傷つけることばを発することはしませんでした。自分の味わった不当な扱いに対して、ふさわしい報いがその人たちの上に下るようにと願うことありませんでした。ただ、自分を痛めつけるような者たちのためにも、赦しを祈られていたのです。全く罪のないそのお方が十字架にかかって、人々からばかにされ、はずかしめを受けたのです。こんな仕打ちは間違っていると、正當に訴えることも、仕返しをすることだって、この方にはその力がありました。でも、そうはせずに、ただ忍耐をもってイエス様は測り知れない苦しみを進んで耐え忍ばれていたのです。

覚えたいのは、いったいどうしてそのように歩まれたのかということです。そのことに関してペテロはこう言っていました。I ペテロ 2 : 23 - 24 に「:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とありました。ほかのだれでもないイエス様が身代わりとして、私たちの罪を背負って死んでくださったからこそ、今、私たちはこの方にあつて罪の赦しを得、そして神の子どもとされました。ただ主の恵みのみわざが、かつて滅びへと向かっていた私たちを助け出し、新しいいのちを与えてくださったのです。だからこそ救われた私たちの責任は、イエス様の模範にならって、だれに対しても親切にすることでした。恵みのみわざによって救われたからこそ、恵みのすばらしさを自分の

こととして知ったからこそ、私たちはそれをことばを通して明らかにしようとするのです。どんな時であろうと、自分自身の受けた恵みに心を留めて、いつもイエス・キリストの福音の知らせをことばでもって、親切で、恵み深く語っていくことでした。

2) 塩味のきいたものであること

二つ目の特徴は「塩味のきいたもので」あることでした。私たちのことばが塩味のきいたものであるというのは、どんな状態のことを言うのでしょうか？何を意味しているのでしょうか？そのことを理解する上で重要になるのは、この「塩」というものが持っている役目、役割です。そして私たちは少なくとも二つの役割を覚えることができます。「塩」を何のために使うかという、一つは味をつけること、そしてもう一つは保存するために用いられていました。

まず、「塩」というのは、食事の際に味をつけるのに用いられます。これは今も同じです。例えば、何かの料理を食べる時に、ひと口食べてみて、それに物足りなさを覚えると、私たちは今だって適度に塩をかけて食べます。塩をかければその料理はおいしくなって、さらに楽しむことができます。味気がない時に、あんまり進んで食べたくないなど思っている、少し塩を加えてあげればうま味つけができて、もっとそれを食べたいというさらなる食欲の向上につながったりするのです。塩というのは、味付けをするという役割がありました。また、加えて、塩というのは何か腐るのを防止するために用いられるものでした。今の私たちは、家に冷蔵庫がありますので、余り想像し難いかもしれませんが、冷蔵庫などない当時は、食べ物を腐らせない一つの手段として塩を用いていました。塩と一緒に保存したい物を包むことによって、腐敗から防ごうとしていたのです。それらが塩の使われ方でした。

そして、パウロがここで信仰者に求めていることは同じでした。つまり大きく二つのことが問われているのです。一つは、私たちのことばがそれを聞いている人たちの味付けになっているのかどうかということです。言いかえると、私たちのことばや話している内容が、それを聞いている人たちにとっても聞いてみたい、もっと知りたいと興味や関心を引くものになっているかどうかです。自分自身の会話を振り返ってみてください。私たちのことばは、神様の愛やあわれみに根ざしていて、キリストのあかしを建てる者にふさわしいものになっているのでしょうか？そしてそのようになっているからこそ、周りで聞いている者たちが、あの人の発言はほかの人とは何か違う、私が知らない思いやりや親切さにいつもあふれている。あの人が信じているというキリストや聖書の神様について自分も知ってみたいと思わせるようなことばでしょうか？そのような味付けの役割をなしているのでしょうか？

また、これに加えてもう一つ言うのであれば、私たちのことばが人々との会話の中にあって、聖さをもたらすものになっているかどうかということです。これも私たちはよくわかるはずですが、神様をまだ知らない者たちと一緒にいる時、その場には神様を喜ばせないような会話がなされることが多々あります。周りの未信者たちは、例えばほかの人のゴシップや陰口を話していたり、適切でない冗談を口にしていたりするかもしれません。そのような状況の中にあって問われるのは、私たちのことばがどんな役割を果たしているのかということです。彼らと同じようになって、神様を悲しませるようなことを話しているのでしょうか？それともその中であって腐敗したことばを口にするのではなくて、かえって世の光として真理のことばを語ろうとしているのでしょうか？そしてそのように歩んでいるからこそ、次第に周りにいる人たちがなぜこの人はほかの人のことをいつも悪く言わないのだろう、なぜ私たちと一緒にいると同じようなことばをいつも口にしないのだろうと、疑問を抱かせるようなことばを私たちは発しているのでしょうか？

そして、これら二つを見た時に、もし私たちのことばが、いつも主に根ざした親切で塩味のきいたものであるとすれば、キリストにならったものであるとするれば、人々は私たちのうちに違いを見ることになるのです。この世は決して知ることのない、ただ神様だけが生み出すことのできる恵みのみわざを、私たちがふるまいやことばで明らかにしていれば、人々はそれを目の当たりにするようになるというので

す。しかもそれは、この世にないからこそ、人々はそれに気づくようになるのです。そして、もしその違いに気がついて、私たちのところにその人がやって来ることがあれば、私たちはそのひとりひとりに対してどう答えたらいいのか、それがわかるということです。その時には、私たちは自分自身のことを話すのではありません。例えばその人がどうしてそのように愛にあふれているのですかと尋ねてくるのであれば、私たちはその時にキリストの愛について教えてあげることができます。もしその人が私たちのところにやって来て、どうして忍耐深いのですかと言えば、私たちは神様の忍耐深さを教えてあげることができます。私たちはそのようにして、人々の目をキリストに向けて、そして救いに、福音に目を向けさせることができるというわけです。だからこそ私たちの行いも、私たちのことばも大切でした。

同じことをペテロもこのように述べています。I ペテロ 3 : 15 - 16 で「:15 むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。:16 ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの正しい生き方をのしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう。」と書いていました。これが、みことばが約束していることでした。みことばが教えてくれていることでした。私たちの責任でもあったのです。もしかしたらどんなに私たちがふるまいやことばであかしを建てていたとしても、祈り続けていたとしても、余りにも頑なで変わらないと思える人が、皆さんの周りにもいるかもしれません。でも、それで私たちがあきらめて、その歩みをやめてしまうわけではないのです。主権者である神様が必ず働いておられる以上、変わらず働いておられる以上、私たちは何よりもまずいつも祈り続けることができます。その神様を見上げて、神様が福音の門をいつか開いてくださることを期待して、私たちは信頼し続けて祈ることができます。また本来であれば、私たち自身ただ滅びへと向かっていた頑なな者にしかすぎませんでした。神様を愛し、神様を礼拝する者として造られたにもかかわらず、ここにいる私たちはみな罪を犯し、創造主である神様に頑なに逆らい続けてきました。その罪のゆえに、すべての者は例外なく聖なる神様の永遠のさばきを受けるしかなかったのです。しかし、その罪の問題をあわれみ深い神様が解決してくださいました。ご自身の御子イエス・キリストをこの世に送って、私たちがまだ罪人として、敵として歩んでいた時に、その大きな愛でもって十字架にかかり、身代わりとして死んでくださったのです。罪のいっさいない神の御子が罪に汚れ、御怒りにのみ値するような頑なで愚かな私たちのために苦しみ、そして死なれました。でもその尊い犠牲を通して、この方を信じるすべての者にその罪の赦しを与えてくださると約束してくださっているのです。

でもそれだけでもありません。この方を信じ、救われた者は新しくされ、そして十字架にかかった後、約束どおりに三日目によみがえって今も生きておられるイエス・キリスト、その主といつまでもともに歩むことができるという喜びも持っているのです。だからこそもしまだこの中に、このイエス・キリストにある救いを知らない方がいるのであれば、きょうという今この日に、この方を自分の救い主として、主人として信じ、受け入れてください。あなたにとって最も必要な罪の赦し、永遠のいのちを今与えることのできるそのお方を心から求めて、この方とともに歩む喜びを知ってください。

この偉大なキリストをもう既に信じておられる皆さん、かつての頑なだった私たちを、救い出してください。信じるすべての者に救いを与えることのできる福音の力を知った私たちにはできることは、理解することのできないすばらしい救いのみわざに感謝しながら、知恵とともに歩み、そして機会を用いてキリストを語り続けていくことです。キリストをあかしする者として、召された者として、ふるまいにおいても、ことばにおいても、私たちの愛する主をあかしする者としてともに続けて歩んでいきましょう。